

コミュ障二ートの人生大逆転劇

~社会不適合者の型破りな生き方~

■著作権について

本冊子と表記は、著作権法で保護されている著作物です。

本冊子の著作権は、発行者にあります。

本冊子の使用に関しましては、以下の点にご注意ください。

■使用許諾契約書

本契約は、本冊子を入手した個人・法人(以下、甲と称す)と発行者(以下、乙と称す)との間で合意した契約です。本冊子を甲が受け取り開封することにより、甲はこの契約に同意したことになります。

第1条本契約の目的：

乙が著作権を有する本冊子に含まれる情報を、本契約に基づき甲が非独占的に使用する権利を承諾するものです。

第2条禁止事項：

本冊子に含まれる情報は、著作権法によって保護されています。甲は本冊子から得た情報を、乙の書面による事前許可を得ずして出版・講演活動および電子メディアによる配信等により一般公開することを禁じます。特に当ファイルを第三者に渡すことは厳しく禁じます。甲は、自らの事業、所属する会社および関連組織においてのみ本冊子に含まれる情報を使用できるものとします。

第3条損害賠償：

甲が本契約の第2条に違反し、乙に損害が生じた場合、甲は乙に対し、違約金が発生する場合がございますのでご注意ください。

第4条契約の解除：

甲が本契約に違反したと乙が判断した場合には、乙は使用許諾契約書を解除することができるものとします。

第5条責任の範囲：

本冊子の情報の使用の一切の責任は甲にあり、この情報を使って損害が生じたとしても一切の責任を負いません。

目次

はじめに.....	3
「俺スゲーw」と調子に乗ってた中学時代.....	4
友達ってどうやって作るの？コミュ障を自覚する高校時代.....	6
大学受験での失敗「自分の人生はもう終わりだ…」.....	12
「俺は負け組…」自己否定感MAXの大学時代.....	14
初めてのバイト。もう働きたくない….....	17
就活と卒検と引きこもり.....	21
大学時代番外編：なんで俺がハゲなきゃならないんだよ…！！.....	28
「何で働かなきゃいけないの？」理解できない社会の現実.....	34
月100万！？夢と怪しさ渦巻くネットビジネスの世界.....	39
余命1年？のニート生活の始まり.....	41
ようやく気づいた「頭を使うこと」の重要性.....	43
ようやく手にした20万。しかし増えたのはお金だけだった.....	46
僕が本当にしたかった生き方とは？.....	48
さらなる進化・成長を目指して.....	49

はじめに

こんにちは。だいきです。

僕は月に数回ブログを書くだけで、
だいたい40万円くらいの収入を得ています。

おかげで、贅沢な暮らしとまではいきませんが、
自分の好きなことができる時間が増え、
かなり自由な生活を送っています。

「そんな話ウソに決まってるだろ!？」
と思うかもしれませんが本当です。

しかし、ここまでたどり着くまでの僕は、
本当に負のカタマリのような人間でした。

- ・バイトですら半年以上続いたことがない。
- ・人に嫌われるのがイヤで、友達ですら本音を言えない重度のコミュ障。
※コミュ障とはコミュニケーション能力がめっちゃ低いってことです。
- ・誰一人として人を信用出来ない
- ・まじめそうに見えるだけで、考えてることはクズそのもの

このように、人に誇れるようなものなど何もない、
ただの社会不適合者でした。

このレポートでは、僕の苦悩に満ちた過去から
現在に至るまでの道のりを、
ストーリー形式で綴ってみたいと思います。

「俺スゲーw」と調子に乗ってた中学時代

僕は北海道で産声をあげた。
ちなみに、生まれてこの方ずっと北海道ぐらし。

小学生まではこれといった大きな悩みも無く、
つまらないと思うので割愛しておく笑

それでは、中学時代の話。

学生時代の中では、この中学生の 때가僕のピークだ。

一夜漬けでちょっと勉強するだけで、学年トップ5は当たり前。
そんなに強いところでは無かったが、
部活のバスケでは、エースのようなポジションもやっていた。

まだまだ未熟な中学生。
これで調子に乗らないワケがない。

今だから言えるが、

「俺は何でもできる！人生なんて楽勝だぜ www」
なーんて思っていたこともある。

ただ僕の場合、

「周りに露骨にアピールしたりすると、
印象は悪くなるから、変なことは言わないでおこう…」
というムダなところには頭は回ったので(苦笑)、
ふつうに友達とは仲良くやれていた。

しかし、プライドはめちゃくちゃ高かったので、
「先輩」というヤツが大嫌いだった。
性格の良し悪し関係なく。

自分が何でも正しいと、カン違いしていたので、
「ここはもっとこうした方がいいよ！」
的なアドバイスされることに、内心カチンと来てた。

その度に僕は、

「さっさといなくなれ！ボケ！」
と何ども心の中で唱えていた。

このエピソードだけで、

僕が社会でうまくやっていくのは難しいだろう

ということが十分に想像できる。

社会人になった時、

この予感は見事的中するのだが(苦笑)、それはまた後のお話。

そして、当時はぜんぜん気にしていなかったが、

この頃から人前で話すのは、なんとなく苦手意識があった。

授業の発表や日直での挨拶。

恥ずかしい気持ちを隠すため、ふざけてやりすごしていた。

でもこの時は、友達と話す分には、何も問題なく喋れたし、

自分が「コミュニケーション」に関して、

そこまで大きな欠陥があるとは思ってもしなかった。

順調に月日は流れ、僕は第一志望の高校へと進学した。

友達ってどうやって作るの？ コミュ障を自覚する高校時代

新たなスタートを切り、楽しい高校生活が始まる…

そんな淡いを抱きながら、僕の高校生活はスタートした。

がしかし…

誰にも話しかけられない。
なんと入学初日にも関わらず、
周りのみんなはすでに良い雰囲気だったのだ。

「コイツらなんでこんなに仲よさげなん！？
今日って入学初日だよな？」

僕はただただ困惑するだけで、
能面のように無表情な顔つきで、
ずっと席についたままだった。

しかし、たまたま中学時代のバスケットで
見知ったヤツがいて、そいつが声をかけてくれた。

「おっ、バスケット部入るの？」

「いや、高校ではやんない」

会話はこの1ターンで終了した。

なぜ僕は高校でバスケットをやらなかったのか？
バスケットが嫌いになったから？

いや、そうではない。

バスケットは今も昔も大好きだ。

中学時代、最後の大会で初戦で負けたからだ。
相手チームはそんなにすごく上手いやつはいなかった。
しかし、185cm くらいの超でかいやつがいた。

ウチのチームはかなり小柄で、
大きいやつでも 175cm くらい。

中でも僕は、中2くらいで身長はストップし、
いちばん小さくて 165 しかなかった。

なので、その圧倒的な高さに対抗するのは難しかった。
その試合、僕は調子が悪く、
10 点も点数を取ることができなかった。
最終的に、5 点差くらいで負けた。

「俺の調子が良ければ絶対に勝ってたはずだ！！
最後の試合でこんな結果になるなんて…」

それまでは、ベスト 8 には必ず入っていたので、
初戦で負けるなんて、微塵も思っていなかった。

傲慢だった僕のプライドはズタボロにされた。

「俺にはバスケの才能なんて何も無かったんだ…」
もう二度とこんな惨めな思いはしたくない。

「頑張っても意味なんて何も無い」

僕が何に対しても消極的で、逃げるようになったのは、この敗戦が大きく関係している。

「またあんなイヤな思いするなんてまっぴらだ！」
そう思って僕はそのありがたい誘いを無下にした。

そして僕はぼっちになった。
休み時間は机に突っ伏して、寝たふりを決め込む。
ぼっち経験者なら非常に共感してくれると思う。

ただ幸いなことに、市内では有数の進学校だったため、いじめみたいなものとは無縁の学校で、何かをされるみたいなことは無かった。

僕が寝たふりをしてる間も、
クラスの人気者たちは、ギャーギャー騒いで楽しそうにしている。

「うっせーな、バカが！
俺は寝たいんだよ…」

本当に寝られたらどんなに楽だろう。
僕は毎日そう願っていた。

こんな憂鬱でしかない日々を数ヶ月繰り返し、
「さすがにこのままじゃまずい」と思い、
僕はけっきょく1年の途中でバスケット部に入った。

とにかく「友達」と呼べる存在が一人でも欲しかった。
バスケットでなら人とのつながりを取り戻せるんじゃないか？
そう思ったからだ。

しかし、すぐに足首の靭帯を切ってしまい、
全治2ヶ月くらいかかり、練習についていけなくなり挫折。
(ホントならもっと早く治っていただろうが、
ふつうにチャリ通していたので、治りが悪かった)

結局1年の終わりごろに部活を止め、
部員とも気まずくなって、ほぼ会話することは無くなり、
僕は再びぼっちに逆戻りした。

高2に入ってから、何もやることがなくなったので、
とりあえず勉強をするようになった。

1年の時は勉強に対しても無気力で、
いつも赤点ギリギリだった。
でも、勉強したら学年で20位くらいに一気に急上昇した。

今までは、いつも100位以下だった僕からしたら、

これは大きな変化だった。

この経験は、僕に自信をほんとにちょっとだけ
取り戻させてくれた。

しかし、それ以上あがることもなく、
本当にできるトップの連中になることはできなかった。

僕はもともと「超」が付くほどの完璧主義。

「中途半端に価値はない」

またまた自分の限界を痛感させられ、むなしくなった。

でも他にやることもなかったのも、
勉強はそれなりにまじめにしていたので、
成績だけはそこからずっと落ちなかった。

「勉強だけはそこそこできるけど、
いてもいなくてもどうでもいいヤツ」

僕のクラスのアイデンティティが確立した。

大学受験での失敗「自分の人生はもう終わりだ…」

3年の時の救いは、人間関係が少し改善されたこと。
どこかに遊びに行ったりできるほどではないが、
休み時間に話せるクラスメイトは何人かできた。

「寝たふりをしなくて済む」のは、精神的にだいぶ救われた。
ふつうの人からしたら、こんなことで喜べるなんて
まったく理解できないだろう。

誰とも一言もかわさない日の方が多かった
今までに比べれば、これは大きな進歩なのだ。

友達じゃないけど知り合い程度。
僕にとってはこの距離感が絶妙で、心地良かった。

3年の夏休みに入った頃になると、
いよいよ大学受験を真剣に考えなければいけない時が来た。

僕は入学当時から、
ただ北海道でいちばん偏差値が高いというだけで、
北海道大学(北大)へ行きたいという思いがぼんやりとあった。

学歴が良い方が就職に有利だろうと
ただなんとなくそう思っていただけだ。

しかし実際には、北大に受かる学力ではぜんぜん無い。
ほぼ毎回E判定(ほぼ合格出来ない)で、
良くてC判定(受かるか微妙)というところだった。

勉強でここまでひどい結果になったのは、
生まれて初めての経験で、かなりヘコんだ。
勉強は、高校時代の唯一のよりどころみたいなものだったので、
それも否定されたみたいで本当に辛かった。

北大の試験本番は、採点するまでもなく試験が終わった瞬間、
「終わった、もう受かる気しねーわ…」と絶望的だった。

当然結果は不合格。

結局僕はセンター試験の結果だけで受かった、
滑り止めの大学にしゅしゅ行くことを決めた。

別に「絶対に北大に行きたい！」
という強い思いも無かったので、
さすがに浪人する気にはなれなかったからだ。

「俺の将来の成功は完全に絶たれた…」
ただただ無気力感に襲われるだけだった。

「俺は負け組…」自己否定感 MAX の大学時代

僕が進学したのは、畜産関係の大学だった。

農業でもするつもりなのか？というと、

そんな気はさらさらなかった。

ただ、北海道内で行ける大学の中から、

自分で行けそうなものをなんとなく選んだら、ここになっただけだ。

「なんとなく」

今思うと、この考え方は本当に危険だ。

思考力が完全に停止してしまっているから。

選択肢を自分ではない外部のものに委ねる、

これじゃ誰のために生きているのか、さっぱりわからない。

自分の人生なんだから、自分で何でも決めないと。

「なぜこの行動をするのか？」

今は常に、こう自問自答するクセを付けるようになったが、

大学時代は何も考えずに、学ぶことを放棄していたことを

本当に後悔している。

そのため、僕の中では大学は、
奨学金という何百万という余計な借金を作り、
親にもムダ金を払わせてしまっただけ、
というものすごく残念なイメージが未だに強い。

もうこんないいかげんな決断をして、
貴重な人生を絶対に棒には振るわない。

この価値観を基準にしてから、
ものすごく人生の充実度は上がった。

ハッキリ言えば、かなり高い授業料だったと思うし、
このことに気づけたのが、
ネットビジネスで稼げるようになってからなので、
かなり時間がかかったが、大学のムダだと思えた時間も、
ちゃんと糧にできたことは、まあ良しとしよう。

ちょっと話が逸れたけど、
ここから大学時代の話に戻ろう。

自分の能力はたかが知れていると、
すでに謎の悟りの境地に至っていた僕は、
もうまじめに勉強する気は全く無かったので、
僕は「リア充のような生活」をすることを
いちばんの目標に掲げた。

高校時代の失敗から学んだことは、
良い人間関係を構築するためには、
スタートダッシュが重要だということ。

最初の印象が悪ければ、後から挽回するのは
かなりのエネルギーを要する。

だから僕は、入学当初はムリをして、
自分の中で最大限のハイテンション
(他人から見れば、それでもふつうの人程度だろうが…)
で接するようにした。
そのおかげで、けっこう友達もできた。

そして、また懲りずにバスケ部にも入った。
やっぱり好きなものは好きだし、
「大学だから軽いノリだろ、それなら俺でも大丈夫」
と思ったらほぼ毎日練習のあるガチな感じだった。

僕は楽しくゆるくバスケがしたかったので、
結局在籍中もめっちゃサボってたし、
バイトをするということで、これまた結局1年辞めた。

大学では、バイトするのも珍しくもなんともないし、
他にもそういう人がいたので、

部の仲間との関係も別に悪くはならなかった。

初めてのバイト。もう働きたくない…

部活を止めた当初はバイトなんて

する気はほとんど無かった。

ただ、めんどくさい部活を辞めたかっただけだし。

それでも、何もしないのは何だかなー

と若干モヤモヤしてきたので、

本当に初めてのバイトをすることにした。

「ラクで稼げる仕事がしたい」

僕のニートとしての才能の片鱗は、

この時すでに開花していた。

ツライ仕事はまっぴらごめんだ。

実を言うと、1年の時に、

部活で農家バイトをやっていたので、

正式には初めてのバイトではない。

この仕事は長芋を朝8時から夕方5時まで、

えんえんと収穫し続けるという、

体力的にはけっこうハードなものだった。

しかし、ムダ話をほとんどしないので、
話すのが苦手な僕にはちょうど良かった。

しかも、1日9000円から1万円くらい
(時給にすると1000円以上)もらえたので、
アルバイト情報誌になんか載っている、
時給700円とかの仕事なんかよりは、
よっぽどおいしいバイトだった。

そのおかげで、判断基準が厳しくなった僕は、
バイトを決めるのはかなり難航した。

しかし、ようやく候補が決まる。
スーパーの惣菜販売の仕事だ。

まあ単に車を持っていなかったのと、
家からそこそこ近かったのと、
時給が他のコンビニとかより50円だけ高かったからだ。

そしてバイトが始まったのだが、
オープンしたばかりだったので、
かなり忙しかった。

たくさんの方がレジに雪崩れ込み、

僕はひたすらレジを打った。

頭がこんがらがって、何度もミスをした。

その時は忙しさに何も考えることができなかったが、
お客の足が落ち着いてきた時、僕はこう思った。

「忙しいし、めんどくさいし、もうやめたい…」

僕は初日にして猛烈に辞めたくなった。

仕事というのは、こんなにしんどいのかと。

まわりの人は何事もなかったかのように、

もくもくと働いている。

「他の人ってスゲーな。

俺にはこんなバイト程度ですらツライや…」

自分の無能さに嫌気が差した。

まだ初日なんだし、ふつうに考えれば

ミスをして当たり前かもしれない。

でも、僕は完璧じゃないと許せない性格だったので、
かなりダメージはでかかった。

おまけに店長やパートなのか社員なのか

よくわからない偉そうなオバサンがいて、

人間関係も最悪だった。

いつもいつも小言を言うだけ行って
どっかへ行ってしまおう。
ただただウザい存在だった。

ただでさえ、ストレスを抱え込みやすかったので、
僕は胸がキュッと締め付けられているような
感覚に陥ることが何度もあった。

この当時は授業も毎日朝から夕方まで
みっちり講義を入れていたので、
授業中はずっと爆睡していた。

さすがに、これじゃあ進級が危ない。
これなら辞める理由にはちょうどよいと思い、
僕はわずか3ヶ月程度で店を去った。

これでようやくラクになれた…
店のドアを出た瞬間、僕はホッとため息をついた。

ここで、僕の大学時代のバイトエピソードについて
まとめておくと、この仕事と他には、
飲食店の厨房のバイトしかしたことがない。

ちなみに、厨房の方は2週間でクビになった。
僕があまりにもダメすぎて、見限られたのだ。

あとは農家の短期バイトや仕送りだけで、
節約しながら暮らしていた。

買いたいものもいろいろあったが、
働きたくない気持ちの方が強かった。

学校での生活の話に戻るが、
バイトという恐怖体験をしてから、
僕は人とコミュニケーションを取ることが
余計に苦手になってしまった。

1年の時は仲良しだった友達とも喋りたくない。
もう人との関わりにうんざりしていたのだ。
この頃から僕の他人行儀な性格は、
より顕著になっていった。

就活と卒検と引きこもり

もう3年になる頃には、
僕は自分から声をかけられるような友達は
数人程度しかいなくなっていた。

まだ数人いただけマシだったのかもしれない。

そして、3年の後半になってくると、
「就職活動」と「卒業研究」という
恐怖のイベントがやってくる。

まずは就活について語っていこう。

僕はもともとなんの興味もなく、
大学に入ったので、やりたい仕事など何一つ無かった。
ウチの大学の卒業生は、
農業系や食品系が主な就職先だった。

しかし、大学の3年間では、
僕はこれらの分野をちっとも好きになれなかった。
というかそもそも働きたくない。

職業 = ニート

これが僕の第一希望の就職先だ。

しかし、こんなことを言えば、
親にぶっ飛ばされる。

なので、とりあえずまじめに就活してる雰囲気

演出するため、僕は聞きたくもない企業説明会に
いろいろと参加した。

もしかしたら、僕でもやりがいを
感じられそうな仕事があるかもしれない。

そんな淡い期待を抱きながら、
何十社の説明を聞いたが、グッとくるものは一つもなかった。

そこで、僕は「何がしたいのか」を
少ない脳みそで考えた。

「やりたいこと」

自分に仕事にしてまでやりたいことなんてあるのか？
でも必死に考えたら、一つだけ可能性があった。

それは「ファッション」だ。
僕は大学生になったころから、
このファッションの魅力にとりつかれていた。

最初の理由は、単純にモテたかったからとか、
そんなよくある話だ。
(もちろんコミュ障過ぎてモテるわけもないのだが…苦笑)

少ない仕送りで、食費を削ってでも服を買ったり、

ファッション雑誌を読み漁っていた。

しかし、ウチの大学は畜産系というだけあり、洒落た格好をしてるヤツの方が、圧倒的に珍しく、おまけに僕は、センスを間違った方向に履き違えていたので、かなり浮いていたと今では思う。

当時はピンクのパンツや、ド派手な星柄のカーディガンなど、服装だけ見れば、かなりのハジケっぷりだっただろう(苦笑) まあハッキリ言ってイタイ黒歴史だ。

でも、こうしたいろいろなファッションに触れることで、洋服そのものの魅力にハマっていき、仕事にしたいと思えたワケだ。

まあしかし、現実には北海道でファッション関係の新卒を募集している企業など、服飾系の専門学校にでも通ってない限り、見つかりっこない。

しかし、東京に出てまで働きたくなかったので、僕は「もうアパレルのバイトでいいやー」と、超いいかげんな選択をする。

このおかげで、もちろん就職先は決まらなかった。

というか、決める気がまったく無かった。

と、僕にとっては「就職活動」ならぬ「終職活動」
って感じだったのだが、大したがんばりもしなかったので、
ポンコツな僕にとっては、まあ当然の結果だろう。

このように就職に関しては大失敗なのだが、
ここからはもう一つの失敗体験、卒検について話していく。

僕が研究していたのは、遺伝子の何かだ笑
正直最後まで何を調べていたのかよくわからない。

理系の卒業研究は、研究室によっては、
かなりハードで、毎日朝から晩まで、
延々と実験の日々を送ることもある。

僕の研究室はけっこうそれに近かった。
毎日毎日実験実験…

僕がこの研究室を選んだのは、
教授が優しそうでラクそうだったからなのに、
こんなの詐欺やんけ！

と後からものすごく後悔したが、
今から変更することもできないので、

まあ言われたとおりに実験していた。

しかし、実験は何度もやっても上手くいかず、
ずっと同じことの繰り返すだけだった。
何をしたいのかマジで意味がわからん。

以前テレビで見た

「マグロの刺し身の上に、
タンポポの花を添えるだけの簡単なお仕事」
をしているようだ。
僕の気持ちの糸がプツンとキレた。

※ちなみに僕は後に、

「そうめんをパックに詰めるだけの簡単なお仕事」
をすることになる(苦笑)
アレは自分がマシーンかと錯覚するほどヤバかった。
もう二度としたくない…

4年時の夏頃に、卒検から逃れるため、
僕は登校拒否になり、引きこもりになった。

携帯に教授からの着信が来る。
僕はそれを何度も見て見ぬふりをした。

しかし、その後僕はなんとか復帰できた。

(この頃は常に気が動転していたので、
なぜ戻れたのか記憶が定かではないが)

これで無事に卒業できる…
と誰もが思うだろう。

しかし、冬にまた僕は引きこもりになる。
さすがにこの時は、自宅にも電話がかかり、
親にもさんざん怒られた。

この時は、もちろん就職も決まっていなかったので、
親には敵対心しか無かった。
だから、うっとおしい説教など、
耳にはまったく入っていなかった。

さすがに、自分のとこの教え子が、
留年するのは気が引けたのだろう。
教授が妥協案を出して、

「実験はもうしなくていいから、レポートだけ書いて」
と提案した。

「まあそれなら、仕方ないからやってやるか…」
謎の上から目線な態度で、僕はその提案を受け入れた。

これなら楽勝だと思っていたのだが、

このレポートのチェックがやたら厳しかった。
なんと書いてもやり直しをさせられる。

「コイツはいったい何様のつもりなんだ!？」
今思うと「オマエが何様だ」と言いたくなるのだが、
当時の僕は、いっぺんぶん殴りたい気持ちをこらえて、
なんとか無事にレポートを完成させた。

おかげで留年せずに卒業もできた。
よくあんな状態で卒業させてくれたものだ。
今では、感謝の気持ちしかない。

大学時代番外編：なんで俺がハゲなきゃならないんだよ…！！

大学卒業まで来たので、
すぐに社会人編に移りたいのは、やまやまなのだが、
僕のプライドを完膚なきまでにへし折り、
他人を徹底的に拒むようになった、
最大の理由について語っておきたい。

それは「若ハゲ」だ。
僕は生まれつきおでこが広い。
ただ、昔は髪の色も十分にあり、

前髪をおろしていたので、気になるほどでもなかった。

しかし、ちょうど二十歳の時だ。

大学からは一人暮らしを始め、

食生活は乱れ、調子に乗って髪を染めたこともあった。

これが良くなかったのだろう。

僕の髪はみるみる抜け始めた。

朝起きる度に、枕には100本近くの毛が抜け落ちている。

これは恐怖以外の何者でもない。

大学3年ごろには、アンガールズの田中みたいな髪型になっていた。

(わからない人はググってみてほしい。

ちなみに僕はハゲてから彼に親近感を持ち、けっこう応援している笑)

先ほどの就活のところでも少し触れたが、

僕はファッションなど、

外見的な部分をすごく重要視している人間だ。

特に大学時代は、外見を磨くことばかりに熱中していたほどに。

そのため、この「若くしてハゲる」という事実、

死にたいと思うことも何どもあった。

こうしたコンプレックスの苦悩というものは、

なった本人にしか、絶対に理解することができない。

周りから見れば些細なことだとしても、
当事者からしたら大問題なのだ。

逆に僕から見て、

「コイツは何でこんなことで悩んでんだ？」
と思うことももちろんある。

つまり、人の価値観は千差万別であり、
悩みも人それぞれなんだ、ということを
若くしてハゲるという貴重な体験を通して僕は学んだ。

人が悩んでいることに対して、

「そんなこと気にすんなよ！」
とか何の解決にもなってないことを言う輩が多いが、
僕はできる限り相手の悩みに寄り添って考えてみよう、
と思えることができるようになった。

今まで他人の気持ちなんて、今までこれっぽっちも
考えてこなかった僕だ。

物理的に多くのものを失ってはしまっただが、
内面的には大きく成長することができたと思う。

実はこの「相手の立場で物事を考える」
という視点は、ビジネスにおいてもすごく重要だ。

これができないと、ビジネスなんて上手くいくワケがない。
だって、相手の求めているものがわかんないんだから。

なかなか強烈なエピソードだったので、
記憶にも残りやすいだろう。
なんとなくでも覚えてくれれば、僕は嬉しい。

ちなみに、現在の僕は、坊主にして、
ふだんはウィッグ(要はヅラ)を被って生活している。

若い女の子だとファッションとして、
楽しんでいる人も多いだろう。

僕の場合は「ファッション」 + 「ハゲ隠し」
という2つの意味を持っている。

実際被ってみると、いろんな髪型ができて面白い。
もともとおでこが広くて、ずっと決まらなかった髪型も、
思い通りの髪型になるので、ハゲてなかったとしても、
ウィッグを被っていたかもしれない。

別に自分からウィッグだということは、基本的に言っていない。
(なので、これを知り合いが見たら、衝撃だろう…笑)
でもバレたり、外さないといけない場面になった時は、

正直に言うようにしている。

「ハゲ」と言われるのは、正直もう別にいいんだ。
実際ハゲてるし、好き勝手に言ってくれていい。

でも、ファッションはトータルコーディネート。
つまり足先から頭まで全てを整えることで、
ようやく完成する。

だから、僕にとっての髪型というのは、
大事なファッションの一部だ。
実際ウィッグが無いと、首から下が20代なのに、
頭だけおっさんになる(苦笑)

これだけはどうしても受け入れがたい。
なのでこれからも、僕はヅラを被り続けるだろう。

一般的には、ハゲたら丸刈りにして堂々と晒す、
というのが男らしくて良い、という風潮が強いが、
これもあくまで「一般的」という多数決という
数の暴力によって決めつけられた価値観だ。

これを読んでいるあなたも、もしかしたら、
「ヅラなんて男らしさのかけらも無い…」
と思ったかもしれない。

でも、それも正直な感想だ。

むしろそんな風に、自分の気持ちに素直になるのはとても良いことだと、僕は思っている。

若ハゲしかり、ネットビジネスしかり、少数派というのは、周りから白い目で見られることが多い。

でも今の世の中、他人の意見に惑わされ、自分に正直に生きていない人がたくさんいる。

そうした中で、自分らしく生きるには、それなりの代償もいるのだと今は受け入れている。でも、僕は今の正直な生き方の方がずっと心地よい。

僕は今まで、人一倍他人の目を気にしすぎて、誰にも嫌われたくなくて、人と関わることができなかった。

「ありのままの自分」をさらけ出すのが怖かった。でも、実際に少しずつ人とコミュニケーションを取る中で、こんな自分でも受け入れてくれる人、環境はあることを知った。

特にネットはその良い例だ。ネットでは、一般的な大多数の意見ではなく、

少数派の個性溢れる意見が評価される。

だから、社会不適合者の僕には、
これしか無いってくらい最高の場所だ。

「無理して大勢の意見に合わせる必要は全く無い」
このことに気づけた時は、自分を受け入れることができた。

番外編なのに、いちばん熱く語ってしまった(苦笑)
それだけ伝えたいものがあったんだ。
そういうことにしておこう。

「何で働かなきゃいけないの？」理解できない社会の現実

地元にはアパレル関係の仕事はぜんぜん募集してなく、
結局僕の最初の勤め先は派遣会社になった。

そこの派遣は軽作業の仕事が中心で、
あまり会話をしなくていいものが多かった。

その中で、僕は馴染みのあった、
農作業の仕事をすることにした。

別に好きでも何とも無かったが、
大学の時にやったことがあったので、
これならできそうと思えたからだ。

しかし、大学の時の短期バイトとは違い、
どしゃぶりの雨の中、真夏の灼熱の炎天下の中、
そして氷点下で降りしきる雪の中、
朝から晩まで、キャベツとブロッコリーの栽培をする。

まるで奴隷のような気分だった。
指導する上の立場の人は、トラックの中で
後ろの荷台に野菜が積まれるのをのんびりと眺めながら、
積み終わるのを確認すると、市場の方へと去っていった。

今思うと、あの人もさらに上の立場の人に
いろいろ言われていたのだろうと思うが、
「あんな楽しんで金もらえるなんていいご身分だな」
と当時はうらやむだけだった。

「俺は何のために生きてんだろう？」
生きる理由を見つけられないまま、
何の刺激もない日々をひたすら繰り返した。

憧れのショップ店員。理想と現実の激しいギャップ

派遣の仕事は年末で終わりを迎え、
年明けからはまた職探しをした。

派遣先から新しい仕事をもらう手もあったが、
「もうあんな仕事やってられるか！」
という思いが強かったので、自分で探すことにした。

そしてついに、僕好みの靴屋で、
バイトの募集があることを知る。

「話すのが大の苦手な僕に、接客なんてできるだろうか？」
そういう気持ちもあったが、それ以上に、
「憧れの場所で働ける」という期待感の方が勝った。

「これを機に、自分自身も生まれ変わろう」
そう決意して、僕は電話をかけた。

無事に採用されることとなり、
僕は憧れのショップ店員になった。
(実際この店は、ショップ店員というより、
「販売員」のようなかしまった感じの雰囲気だった)

自分の好きなものに囲まれた中で仕事ができる、

とても幸せな瞬間だった。

ホントに最初だけは。

少しずつ仕事をやっていく内に、僕は違和感を覚えた。

この仕事は、あくまで販売することが目的であり、

接客がもっとも大事だということに。

ちょっと考えれば誰でもわかることだが、

販売員に重視されるのは、人にモノを売る力だ。

しかし、僕にはそんなものまったく無い。

ただファッションが好き。

でもここではそんなもの、何の価値も無いのだ。

僕の接客スキルなんて、底辺中の底辺。

質問されても何も答えることができずに、

先輩の社員を呼ぶしかなかった。

作業はトロいし、お客に何を言われてもあたふたするだけ、

僕はお客にも他の店員にも、

迷惑しかかけることができなかった。

日が経つにつれ、接客が怖くて怖くてしかたなくなった。

すぐに僕はこの仕事は向いていないと気づいた。

毎日毎日怒られた。

「自分でもどうしようもない
ダメ人間だってことはよくわかってんだよ…」

僕のためを思って叱ってくれていたのだろうが、
人格を否定されてるような気がして、
働き始めて2ヶ月後、僕はうつのような状態になる。

そして僕は初めて、仕事をサボった。
社会人としては、あるまじき行為だろう。
でも、僕にはもう職場に行く気力なんて無かった。

ただただ否定されたくなかった。
店長と話合った末、僕は辞めることにした。

そして、ある程度精神が回復したので、
僕はまた派遣の仕事をすることにした。

「人には向き不向きがある。
俺に接客は無理なものだったんだ。
やっぱり俺には、こういう仕事があってるんだ…」

自分を無理に正当化しようとしたが、
今度は逆に退屈過ぎて、つまらない。
もうどうしたらいいのかわからない。

今後の人生に何も期待できなくなった、そんな時だった。

僕の運命を変える瞬間が訪れたのは…

月 100 万！？ 夢と怪しさ渦巻くネットビジネスの世界

いつものようにヒマつぶしに

ネットサーフィンをしていた時だった。

「月 100 万稼ぐ大学生が稼いだ方法教えます」

という広告に目が行った。

「んなワケねーだろ。バカバカしい…」

常識的には考えれない。

そもそも大学生なんて、バイトしかできないはずだ。

授業もサボってどんなに働いても 20～30 万が限度だろう。

でも僕はその広告が気になってしかたなかった。

怪しいとは思いつつも、その広告をクリックする。

そして僕は「ネットビジネス」という言葉を知った。

インターネットを使えば、ラクしてお金が稼げる。

こんな夢のような事実があることに大興奮した。

騙されているとは思いながらも、
僕はネットビジネスについて、調べることにした。

まずはじめに「せどり」というのをやった
かんたんに言うと、本を古本屋で安く買って、
それを Amazon など高く売るだけだ。

これなら自分にもできそうだと、
実際にやってみたら、そんなことはなかった。

まず古本屋まで行くのがめんどくさいし、
そもそも周りの目がやたら気になる。
結局 1 時間程度やってみて、
何の成果もなく、これはムリだと判断した。

次に始めたのが、アフィリエイトだ。
これが今の僕のメインの収益源になっている。

アフィリエイトは、
ブログやメールを書き、
そこで商品やサービスを紹介するビジネス。

すべてネットでできて、せどりみたいに
仕入れるお金もかからない。
金の無い僕にとっては、まさにうってつけだ。

僕はアフィリエイトの情報発信をしている人のメルマガを読み漁り、信頼できそうな人から2万円ぐらいする情報商材を買った。

運が良いことに、僕はこの教材で、1ヶ月ぐらいですぐに1万円くらい稼げてしまった。

「このままいけば、俺も月100万稼げるんじゃない？w」

さらに良いのか悪いのか、このタイミングで派遣の期間が終わった。

そして僕は完全なニートになる。

余命1年？のニート生活の始まり

もうあんなツライだけの仕事なんてしたくない。アフィリエイトで自由気ままな生活をしてやるんだ！

この一心で、僕は毎日ブログを作り続けた。といっても、1日せいぜい2~3個だ。

もともと真剣に頑張ったことのない人間だ。

僕が頑張るといったところで、人並み以下なのかもしれない。

アフィリエイト作業に打ち込んでから半年、

いくらブログを作り続けても、1万円が3万円になるだけだった。

そしてついに、親に「なんで働かないんだ！」と怒られる。

僕は今までも次の仕事を決めるまでに、

だいたい1~2ヶ月くらいはかかっていた。

なので、親は今回もそうなのだろうと

あまり心配はしていなかったのだろう。

でも、さすがに半年となるとそうも言ってられない。

親からすれば当然の行動だ。

その時の僕には、社会で働くということなんて、

一切選択肢として無かった。

僕はアフィリエイトというのをやっていると告げ、

「1年だけ猶予を下さい。これでムリなら働く」と行った。

しかし、本当は、

働くことなんて考えられなかったので、

ダメだったら死のうと思っていた。

今思えばバカな話だが、
人間焦った時に、まともな思考なんてできるワケがない。

そして僕の安い命をかけた1年間の幕を開ける。

ようやく気づいた「頭を使うこと」の重要性

これまで僕は、数を作れば収入が増えると思い込んでいた。
しかし、そんな上手い話などない。

何も考えずに作業していたところで、
1万円が3万円程度に増えただけだった。
作業量も一向に変わらない。

「あれ？コレって、働いてた時とっしょじゃないか！？」

これまでの悪夢がよみがえる。
寒気がするくらいゾツとした。

あんなにやりたくなかったことを、
今も変わらずやっていたことに。

ここで、僕は思い切って方向転換をする。

「記事の質」を意識することだ。

僕はこれまで中身の無いクソみたいな記事を
たくさん量産していただけだった。

それでも中途半端に稼げてしまったから、
この方法が正しいとカン違いし続けていたのだ。

そこで、僕は新しい教材を買い、
質を重視した手法を学ぶことにした。

この教材は、一度記事を書いてしまえば
何年にも渡って読まれる記事作るというコンセプトだった。

「ブログを資産にする」
という考え方だ。

これなら記事が増えていけば、
多くの人に読んでもらえるようになるので、
どんどん記事を書くペースを減らしていける。

僕に足りなかったのは、この「資産化する」という考え方だった。

そして、もう一つの重要なことに気づく。

「稼いでいる人から直に教えてもらう」ことだ。

僕は今まで、自分のやり方が間違っているなんて
気づけなかった。

だからこそ、今度は回り道をしないためにも、
プライドが許さなかったが、人に教わることを決めた。

記事の質にこだわるようになると、
頭をたくさん使う。

今まで何も考えずに生きてきた僕にとっては、
これはかなり辛い作業だった。

記事を添削してもらえば、
「何が言いたいのかわからない」
「文の構成が良くない」
などさんざんボロクソ言われた。

めちゃくちゃヘコんだ。

でも、何がなんでも稼いでやるという意地だけで、
なんとか食らいついていった。

ようやく手にした 20 万。しかし増えたのはお金だけだった

添削でも「良い記事ですね(^^)」

と褒められるようになることも多くなった頃、
僕のブログにアクセスがいきなり増え始めた。

そして、その3ヶ月後くらいに、
僕の月収は 20 万円を越えた。

実はこの時、すでに約束の1年を少し過ぎていた。
しかし、それまでに5万、10万と確実に収入が増え、
これならやっていけるという確信があった。

とりあえず 20 万あればなんとかなる。
その後は安定して 20 万以上稼いでいた。

親からもいろいろ言われることは無くなった。
稼いでいるのは事実なので、
不審に思われながらも、文句は言えなかったのだろう。

自分で稼げるようになったことで、
精神的にはだいぶラクになった。

そして、収入も増え続け、30万、40万と増えていった。

何をしてもいいので、
とりあえず大好きなマンガやアニメを
毎日のように見続けた。

僕の思い描いた理想の生活だった。
しかし、何か物足りない…

誰とも関わらなくていい、
好きなことを一日中できる、
十分に満足の行く生活なのに。

いったい何がこんな気分させるのだろう？

ここで僕は「自分が本当にしたいこと」
について考えるようになる。

僕が本当にしたかった生き方とは？

僕は勉強を自分からするようになった。

昔はあんなに大嫌いだった勉強を。

稼いだお金は教材やセミナーにつぎ込んだ。

そしてたくさんのかたを学ぶ中で、

僕の人生をより良くするために必要なことは、

「人とのつながり」

「自己成長」

この2つが大きく関係していると気がついた。

月に何百・何千万と稼いでいる人は、

とにかく勉強家な人ばかりだ。

知識・経験の幅がめちゃくちゃ広い。

そういう自分にとっては、未知の世界に触れることで、

僕もこうした人間になりたいと強く思うようになった。

仕事に対する価値観も激変した。

本来、仕事というものは、

人にやらされてやるようなものではないということだ。

おかげで今は仕事も大好きになれたし、
自信を持つことができ、コミュ障もだいぶ改善してきている。

僕がさんざん悩んできた多くの悩みも
さほど気にならなくなってきた。

自分が成長すれば、多くのことを考えられるようになるし、
周りの人たちにも、良い影響を与えることができることがわかった。

これからもたくさん多くを学び成長し、
理想の人生を目指して邁進していくつもりだ。

そして今、僕は人生を大きく変えてくれた
ネットビジネスの魅力を伝えるために、情報発信をしている。

さらなる進化・成長を目指して

以上が僕のこれまでの歩みです。
思いの丈をとにかく吐き出し尽くしました。

このレポートを読んで、自分の人生を見つめなおし、
ほんの少しの勇気を出して、新たな一歩を踏み出して、

自分らしい生き方を見つけてもらえたらなと、
心から願っています。

だいぶ長くなってしまいましたが、
それでも最後までお付き合いいただき、
本当にありがとうございます。

感想もいつでもお待ちしております。

だいき

「月40万稼ぐコミュ障ニートだいきのメールマガジン」
は下記リンクから登録できます↓

[無料メルマガ登録はこちら](#)